コロナ禍における人々の行動変化が地域愛着に与えた影響に関する研究
――川崎市宮前区を対象として――

1882022　小泉　勇真
指導教員　　高見沢実教授　　野原卓准教授　　尹莊植助教

1. 研究背景・既往研究との位置づけ・研究目的

コロナ禍によってテレワークやオンライン診療など生活スタイルが大きく変化し、地域に接する機会が増えたり、新しい一面を発見したりすることにより、自分の住む地域が見直されている。世界中で生活スタイルが変化し、地域との接し方が変わった大きな転換点であるといえる。

既往研究では風土との関わりの大きい交通手段を主に使う人が地域愛着が高くなる傾向を示した萩原らの研究 [1]、地域愛着が物理的環境と社会的環境(※1)への接触によって形成されることを示した渡辺の研究 [2]がある。本研究ではコロナ禍によって地域との物理的･社会的な接触が大きく増加したことや、新しい場所やつながりを発見したことによって地域愛着が増加したという仮説をもとにコロナ禍における行動変化や愛着変化を記録し、仮説を明らかにする。

2. 研究の方法

本研究では 1. に述べた仮説を立証することを目的として、川崎市宮前区の宮前平駅から半径 640m 以内を対象とするアンケート調査を行った。960 部を無作為に投函し、郵送にて回収した。回収率は 21.5%であった。

アンケート中の生活や地域愛着の変化に関する項目では、我々の気持ちや行動変化に沿った指標として、コロナ関連のツイート数によって 2020 年 1 月以前の「コロナ前」、2020 年 1～8 月の「コロナ初期」、2021 年 9～11 月の「現在」の 3 つの時期に分けて質問をした。

アンケート結果から、コロナ禍によって地域愛着が上がった人の特徴(内的要因)とコロナ禍に再評価された場所の特徴(外的要因)の 2 つの観点でクロス集計を行い分析した。

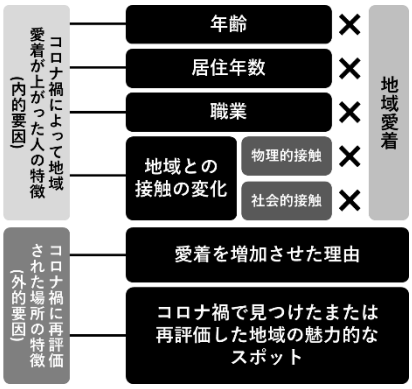

図 1. 研究の構成(※2)

3. 宮前平駅周辺の概要

宮前平駅が位置する川崎市宮前区は東京都と横浜市に挟まれる川崎市の西北部に位置する面積 18.61 ㎢、人口 234,514 人(2021 年 11 月 1 日現在)、世帯数 103,628 世帯(2021 年 11 月 1 日現在)の区である。区を貫くようにして東急田園都市線が走っており、区の中央部には東名高速の東名川崎 IC がある。コロナ禍で生活スタイルを一番大きく変えたのは通勤通学などで日常的に郊外から都心へ移動していた人であるという仮説のもと、典型的な郊外住宅地としての特徴を強く持ち、該当する人が多く住んでいると考えられるこの地域を対象とした。

4. 調査結果

4.1. コロナ禍による愛着の変化

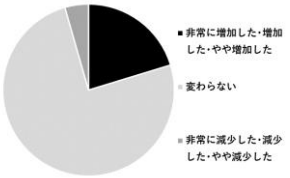

図 2. コロナ前→コロナ初期における愛着変化 (n=202)

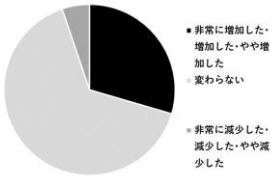

図 3. コロナ前→現在における愛着変化の関係 (n=193)

コロナ前に比べて愛着が変化したかという設問に対して、コロナ初期において約 75%、現在において約 65%の回答者が「変わらない」を選択した。しかし、コロナ初期で約 2 割、現在で約 3 割の人はコロナ前に比べて愛着が「非常に増加した」「増加した」「やや増加した」と答えている。全体としてコロナ前→コロナ初期よりもコロナ前→現在のほうが「非常に増加した」「増加した」「やや増加した」と回答した人が多く、生活スタイルが急激に変わった後、ゆっくりと地域愛着が醸成されたものと考えられる。

4.2. コロナ禍によって愛着が上がった人の特徴

4.2. 1. 年齢と地域愛着変化

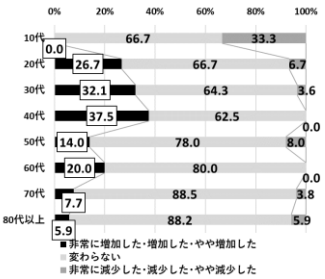

図 4. 年齢とコロナ前→コロナ初期における愛着変化の関係(n=201)

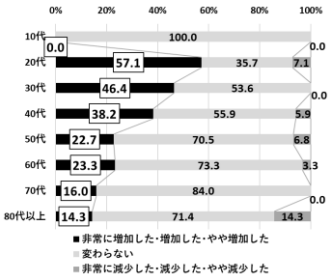

図 5. 年齢とコロナ前→現在における愛着変化の関係 (n=191)

年齢が上がるほど現在持っている地域愛着は高くなる傾向であった。しかし、年齢とコロナ前→コロナ初期･現在における愛着変化でクロス集計を行ったところ、コロナ前→コロナ初期において働き盛りの世代の愛着が増加傾向にあり、10 代や高齢者は「変わらない」または減少した割合がやや高い。また、コロナ前→現在においては 10 代を除き、若い世代ほど愛着が増加している傾向にある。

全体としては元々地域への愛着が高く、生活スタイルもあまり変化していない高齢者はコロナ禍においても地域愛着は大きく変化せず、生活スタイルが大きく変化した若い世代がコロナ禍を機に愛着を増加させている。

4.2. 2. 居住年数と地域愛着変化

居住年数と愛着変化でもクロス集計を行った。コロナ前→コロナ初期、コロナ前→現在のどちらにおいても居住年

数が短い人ほど地域愛着が増加した傾向が若干見られる。居住年数が短い人の方が地域との接触が増えた際に新しく目にするものが多いためと考えられる。この傾向はコロナ初期に比べて現在のほうが強くみられる。

4.2. 3. 職業と地域愛着変化

職業と愛着変化でクロス集計を行った。コロナ前→コロナ初期において、コロナ禍によって通勤日数が大きく減少した会社員(コロナ前→コロナ初期における通勤日数の減少日数が全体平均約1.38日/週に対して会社員平均は約2.17日/週)はサービス業、サービス業以外ともに約3割の人が「非常に増加した」「増加した」「やや増加した」(以下「増加の選択肢」)を選択している。一方でパート･アルバイト、医療関係者、自営業･自由業は通勤回数がほとんど変わっておらず、愛着も変化していない人が7割以上を占める。

コロナ前→現在においては専業主婦･主夫(36.4%が増加の選択肢)、サンプル数5と少ないものの大学生･大学院生･専門学校生･短大生(60.0%が増加の選択肢)が増加の選択肢を選択した人の割合を大きく伸ばしている。

4.2. 4. 地域との接触の変化と地域愛着変化

愛着変化を「非常に減少した」を0点～「非常に増加した」を6点としてポイント化し、散歩や会話など、地域との接触の変化量との相関関係を分析した。コロナ前→コロナ初期において愛着変化は、散歩頻度の変化[回/月] (相関係数 0.42)と相関関係があり、普段通らない道･行かない場所へ行く頻度の変化[回/月] (相関係数 0.33)ともやや相関関係が見られた(空欄のあるデータは除外)。その一方で外出日数変化[回/月]、地域で過ごす時間の変化[時間/月]、地域の人との対面会話頻度[回/月]、地域の人との電話･オンラインでの会話頻度[回/月]との相関は見られなかった。

また、コロナ前→現在においても同様に分析すると、散歩頻度の変化(相関係数 0.23)、普段通らない道･行かない場所へ行く頻度の変化(相関係数 0.37)と弱い相関関係が見られた(空欄のあるデータは除外)が、外出日数変化、地域で過ごす時間の変化、地域の人との対面会話頻度、地域の人との電話･オンラインでの会話頻度との相関はコロナ初期同様相関関係が見られなかった。

4.2. 5. 地域との物理的接触の変化と年齢

コロナ前→コロナ初期において地域愛着と特に深い関係のみられた年齢と散歩頻度に関して分析を行った。10代を除き若い年代ほど散歩頻度が増加した傾向にある。

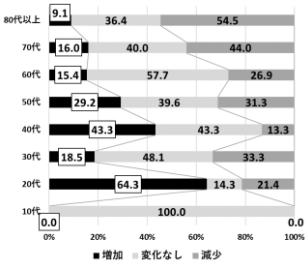

図6. 年齢とコロナ前→コロナ初期における散歩回数変化[回/月]の関係[%] (n=184)

また、コロナ前→コロナ初期において散歩頻度が変化なしまたは減少したにもかかわらず地域愛着を増加させた回答者(全14名)について分析を行ったところ、愛着増加の理由として「地域の人の良さを再発見したから」を選ぶ割合が平均以上であった。また、このグループはコロナ前、コロナ初期、現在のどの時期においても対面で地域の人と会話をする頻度が全体平均よりも高い。

4.3. コロナ禍に再評価された場所の特徴

表1. スポットの分類

コロナ禍で発見または再評価したスポットの分類	
環境	眺望の良い場所や心地よいカフェなど、快適に過ごすことができる場所。愛着が増加した理由の質問の「新しく地域で心地よい場所を見つけたから」に対応する。
生活	品揃えの良いスーパーやテイクアウトが便利なレストランなど、利便性を評価されたもの。愛着が増加した理由の質問の「地域の利便性の良さを再発見したから」に対応。
コミュニケーション	地域の人とふれあうことができる場所、イベント、対応の良いお店など。愛着が増加した理由の質問の「地域の人の良さを再発見したから」に対応する。
移動	レンタサイクルや駅など地域内の移動が便利になる場所。愛着が増加した理由の質問の「レンタサイクルなど、地域内の移動が便利だと感じたから」に対応する。
密回避･コロナ対応	人同士の間隔が広くとれる、おうち時間を充実させられるなど、新しい生活スタイルにマッチした場所。愛着が増加した理由の質問の「地域が新しい生活スタイルにマッチしていると考えたから」に対応する。
食事	美味しいレストランなど、グルメに関する場所
運動	スポーツを楽しんだり散歩の目的地になったりする場所
その他	以上に当てはまらないもの

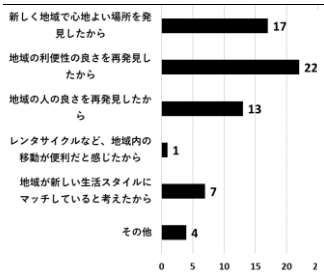

図7. コロナ前→コロナ初期において愛着が増加した人の理由[人] (n=64) (MA)

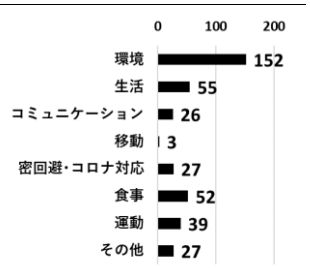

図8. コロナ禍で発見または再評価したスポット (n=123) (MA)

コロナ前→コロナ初期で愛着が増加したと答えた人にその理由を尋ねたところ地域の利便性の良さや新しく見つけた心地よい場所を挙げる人が多かった。また、コロナ禍で発見または再評価されたスポットを表1の項目で分類したところ、「環境」に当てはまるものが最も多かった。近距離の生活圏内に生活に必要な施設や快適に過ごせる場所が充実していることは、ウィズコロナ社会において地域愛着を高める要因の一つになると考えられる。

5. まとめ

調査の結果より、生活スタイルの変化によって散歩の増加などの地域への物理的接触が増加することで地域愛着が高まることが示された。中でも若い世代は特に散歩による物理的接触を増やし、地域愛着を増加させる傾向が強いことが明らかになった。その土地に触れてもらい、物理的接触を増加させる活動は、特に若い世代に対して地域への愛着を深めてもらうという点において有効であると考えられる。また、散歩以外でも質の高いコミュニケーションを地域の人ととることで地域愛着を高めることができることが明らかになった。

※1　渡辺の研究では物理的環境要因として公園・遊歩道の利用頻度、社会的環境要因として近所づきあいを設定している

※2　本研究では散歩などによって地域を体験することを「物理的接触」、地域の人との会話などを「社会的接触」と定義する。

主な参考文献

1). 萩原剛、藤井聡(2005),「交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析」,土木計画学研究・講演集第32巻

2). 渡辺由希(2017)「地域への愛着によって促される地域活動の参加傾向」淑徳大学大学院研究紀要第24号